

第 19 回クラシックを楽しむ会

2015 年 3 月 22 日 (日) 18:00~21:30

歌劇「ドン・ジョバンニ」(モーツァルト)

会場等：メトロポリタン歌劇場

2000 年 10 月

楽団等：メトロポリタン歌劇場管弦楽団

同合唱団

指揮：ジェイムズ・レヴァイン

演出：ゼッフィレリ

出演：ブリン・ターフェル ドン・ジョヴァンニ
フェルッチョ・フルラネット レポレッチョ
ポール・グローヴズ ドン・オッターヴィオ
ルネ・フレミング ドンナ・アンナ
ソルヴェイグ・クリンゲルボルン
ドンナ・エルヴィーラ
ジョン・レリア マゼット
ヘイキョン・ホン ツェルリーナ
セルゲイ・コプチャク 騎士長
その他



フルラネットとクリンゲルボルン



ジョン・レリアとヘイキョン・ホン



ルネ・フレミングとグローヴズ



コプチャクとブリン・ターフェル

台本について

「ドン・ジョバンニ」の台本はイタリア人ダ・ポンテが書いた。14 世紀スペインの稀代の放蕩者ドン・ファン伝説をもとにしたフランス人モリエールの「ドン・ジュアンまたは石像の宴」など種々の作品を台本の素材にしている。

物語のストーリー

主人公ドン・ジョバンニは 2000 人以上の女性を誘惑してきたが、ある日突然歯車がくるってきた。犯そうとした女性の父親を殺す羽目になり、そこから逃走しているとき昔捨てた女性とは気づかずに声を掛けてまた逃げる。さらに結婚式を迎えた村娘を誘惑しようとして失敗するが、彼の従者を犯人に仕立てて逃げのびる。

次に先ほどの捨てた女性の女中に目をつけるが村人たちが現れて失敗。主人をかばっていた従者も主人の悪事を白状し、主従二人は恨みを持つ皆に追いつめられる。ほうほうの体で逃げのびた主従二人が墓地で落ち合うと、自分が殺した男の石像が突然声を出し「その笑いも今宵限りだ」。ところが彼は不逞にも石像を晚餐に招待する。晚餐に石像が現れて悔悛を迫るが彼はあくまで拒み、石像に手を掴まれたまま地獄の業火に呑み込まれる。

第 20 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「サムソンとデリラ」(サン・サーンス)

4 月 26 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

フランス・オペラの代表作。バレエ「バッカナール」の音楽は有名。アリア「あなたの声に私の心は開く」は心にしみる名曲。

5 月以降、「カルメン」など定番歌劇の他、「ルチア」、「夢遊病の女」などを予定。

あらすじ

時と場所

17世、スペインのある町。

登場人物

ドン・ジョヴァンニ (バリトン)

女たらしの貴族。アンナを犯そうとして父の騎士長に見つかり決闘で殺して逃げる。

レポレッロ (バス)

ジョヴァンニの従者。彼にはついていけないと言いつつも、金や脅しでついていく。

騎士長 (バス)

娘アンナを救おうとしてジョヴァンニと決闘して殺される。石像になって彼に悔い改めるよう迫る。

ドンナ・アンナ (ソプラノ)

騎士長の娘でオッターヴィオの許嫁。ジョヴァンニに夜這いをかけられ悲鳴をきいた父親を殺される。

ドン・オッターヴィオ (テノール)

アンナの許婚。復讐は忘れて結婚しようと言いつつも、説得するが・・・。

ドンナ・エルヴィーラ (ソプラノ)

気品ある女性でジョヴァンニの結婚詐欺にあったが諦められない。彼に復縁を迫り改心させようとしてつくつく試みる。ジョヴァンニは彼女の美しい召使をも誘惑しようとする。

ツェルリーナ (ソプラノ)

マゼットとの結婚式を迎えた村娘。ジョヴァンニに口説かれるとその気になる。

マゼット (バス)

ツェルリーナとの結婚式を迎えた農夫。彼女の尻に敷かれている。

【第1幕】 騎士長の屋敷の中庭、街道、村の広場、ドン・ジョバンニの屋敷

従者レポレッロを引き連れ、稀代の色男ドン・ジョヴァンニは夜な夜な女性の家へ忍び込む。今宵は騎士長の娘ドンナ・アンナの部屋へ忍び込むが、騎士長に見つかり決闘で刺し殺してしまう。アンナは婚約者ドン・オッターヴィオに、父の仇を探しだして復讐してほしいと求める。

ジョヴァンニは逃げる途中、通りすがりの女性に声をかけるが、それは彼に捨てられてもまだ愛し、彼を探していたドンナ・エルヴィーラ。ジョヴァンニは大慌てで逃げる。後を託されたレポレッロは彼女に、ヨーロッパじゅうの2000人もの女性たちをたぶらかしてきたジョヴァンニを諦めるよう「**これがうちの旦那に泣かされた女性たちのカタログ**」を歌う。

農夫マゼットと村娘ツェルリーナの結婚式が始まろうというとき、ジョヴァンニがやって来て花嫁を誘惑「**お手をどうぞ、手と手を取りあって誓いをかわそう**」とするが、すんでのところでエルヴィーラが止める。アンナは父の仇、犯人探しの協力をジョヴァンニに求めるが、話すうちに彼こそ犯人だと気づく。

ジョヴァンニは村人たちを招いてパーティを開き上機嫌で「**シャンパンの歌**」を歌う。焼きもちを焼くマゼットは軽薄な新婦に怒るがツェルリーナは「**ぶってよ、ぶってよ、私のマゼット**」と機嫌を取る。パーティにアンナたちが加わってジョバンニを追いつめ大混乱となる。

【第2幕】 村の路上、騎士長の屋敷の前庭、墓地、ドン・ジョバンニの屋敷の広間

レポレッロは主人ジョヴァンニに愛想をつかして暇を申し出るが金に目がくらんで撤回。レポレッロと服を取り換えたジョヴァンニはエルヴィーラの小間使いに「**窓辺に来ておくれ、私の宝よ**」と誘う。マゼットと農民たちはジョヴァンニを殺そうとやってくるが、レポレッロに変装したジョヴァンニはマゼットを打ちのめして逃げる。痛がるマゼットにツェルリーナは「**そんな痛みは私が治してあげるわ**」と慰める。ジョヴァンニの服を着たレポレッロは追いつめられて正体を明かして命からがら逃げ、ジョヴァンニと墓場で落ち合う。すると、騎士長の墓の石像が口を開き「その笑いも今宵限りだ」と喋り出す。驚く2人だが、ジョヴァンニは臆せず石像を晚餐に招待する。夜、石像が約束通りジョヴァンニの家に来た。石像はジョヴァンニの手を掴んで「悔い改めよ、生き方を変えろ」と迫るが、ジョヴァンニはあくまで拒否。石像に手を掴まれたまま炎の中へ引きずり込まれて地獄に落ちる。

出演者について

ブリン・ターフェル（ドン・ジョヴァンニ）

1965年英国北ウェールズ生まれ。現代を代表するバス・バリトンの一人。ジョバンニ役、フィガロ役、マゼット役、レポレッコ役、ファルスタッフ役など世界的に活躍している。

フェルッチョ・フルラネット（レポレッコ）

1949年イタリア生まれ。ジョバンニ役、レポレッコ役の他、椿姫、ラ・ボエーム、ドン・カルロなど。

ポール・グローヴズ（ドン・オッターヴィオ）

1964年アメリカ生まれ。メトロポリタンデビュー後、ドン・オッターヴィオ役、魔笛のタミーノ役でザルツブルク音楽祭に出演するなど世界的に活躍。一昨年暮れに上映した「魔笛」が思い出される。

ルネ・フレミング（ドンナ・アンナ）

1959年アメリカ生まれ。現代を代表するリリコ・スピント・ソプラノの一人。20世紀を代表する巨匠ショルティは彼女のことを「私の長い人生において、ここまでの水準の高いソプラノ歌手には二人しか出会っていない。ルネ・フレミングとレナータ・テバルディだ」と述べている。

ソルヴェイグ・クリンゲルボルン（ドンナ・エルヴィーラ）

1963年ノルウェー生まれ。世界の一流歌劇場で幅広いレパートリーを歌って活躍。

ジョン・レリア（マゼット）

1972年カナダ生まれ。メトロポリタンデビュー後、世界の一流歌劇場で活躍中。

ヘイキョン・ホン（ツェルリーナ）

1959年韓国生まれ。メトロポリタン歌劇場のほか世界の主要歌劇場でタイトル・ロールなどを歌う。

セルゲイ・コプチャク（騎士長）

1948年スロヴァキア生まれ。メトロポリタン歌劇場のほかミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場などで歌っている。

原作の経緯

ティルソ・デ・モリーナ(スペイン大航海時代末期の修道僧、スペイン演劇の黄金時代を代表する劇作家)

「セビーリヤの色事師と石の招客」はティルソ・デ・モリーナが1630年に出版した宗教的な教訓劇で、ドン・ファン伝説をモチーフにした世界最初の戯曲。スペイン各地の大衆劇場で大変な人気を博した。

この作品は、当時スペインが支配していた南イタリアでも人気。情熱的なイタリア人は原作の主人公に快楽追求者の性格を付加、石の騎士像が口を利いたり幕切れに主人公が雷に打たれるなど演出効果も工夫した。これらイタリア人による劇団がフランス各地で公演し人気を博した。



モリエール(ルイ14世時代にフランス古典喜劇を完成。モリエール劇団はコメディ・フランセーズの前身)

ルイ14世の御前で上演した彼の代表作「タルチュフ」が宗教界の猛烈な圧力で上演禁止に。劇団維持と狂信者への恨みを晴らすため、当時流行のドンジュアン伝説の著作をそっくり流用した性格喜劇の傑作「ドン・ジュアンもしくは石像の宴」を1665年に創作。上演を大好評で開始したが狂信者達の更なる反撃にあい上演停止に追い込まれ、生前に再演されることはなかった。



ロレンツォ・ダ・ポンテ(モーツァルトの名作オペラの台本で有名な作詞家、台本作者)

イタリア出身の僧侶ダ・ポンテがウィーンの宮廷詩人になったばかりの頃、(7歳年下の)若いモーツァルトの依頼で、多忙な時間を割いて書いた台本「フィガロの結婚」によるオペラがプラハの街を挙げた空前の大ヒット。プラハ劇場から新作オペラを委嘱されたモーツァルトの依頼で「ドン・ジョバンニ」の台本を(他の作曲家の台本を抱えたまま)超人的な速さで2か月で仕上げた。オペラはプラハの国立歌劇場で1787年に初演、大成功を収めた。

